

2023年11月12日(日) 主日朝礼拝説教

『外なる人、内なる人』井上隆晶牧師

Ⅱコリント4章16節～5章5節、マタイ福音書17章1～8節

①【内なる人=キリストの似姿】

16節に「だから、わたしたちは落胆しません。たとえ私たちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」という有名な言葉が出てきます。外なる人というのはこの私たちの肉の体のことを言っています。内なる人というのは、自分の心や魂が信仰によって新しくなることだと読んでいる人が多いと思いますが、そうではなく、洗礼の時に神が私たちの内にお造りになった「新しい人、キリストの似姿」のことなのです。主はニコデモに「誰でも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」(ヨハネ3:5)と言って「生まれる」という表現をされました。パウロも「大切なのは、新しく創造されることです。」(ガラテヤ6:15)と書いています。だから不思議なのですが、新しい人間が古い人間の中に生まれた、創造されたということなのです。この新しい人こそキリストの似姿です。

●G・A・マローニーはこう説明します。「まず生まれた時に神の像を受ける。それは無くならない。そして洗礼の時、キリストの似姿を受けるが、それは胚の形である。成長するにつれて、これも大きな背丈になり活気に満ちてくる。けれども絶えず神に向かって進まず、故意に神に背を向けて、神の命から離れ、死に向かっていくならば、似姿は見失われてしまう。…しかし神の似姿から遠ざかったとしても、いつもこの神の像はなくなる。」

「わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」とあります。「新たに」という言葉は英語では「renewed (リニュード)」です。よく店舗を改装してリニューアルオープンしたと言う時の「リニューアル」です。「新しくなる、更新する、取り換えられる」という意味です。私たちの内なる人は、神によって日々新しくされているということです。皆さんはその感覚がありますか？でもパウロは感じていて、こう書いています。「鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造り変えられていきます。これは主の霊の働きによることです。」(Ⅱコリント3:18) 私たちの土から出来た自然の体は衰えますが、この「内なる人」は日々、新たにされるのです。だから落胆しないということです。落胆は英語では「lose heart」です。「勇気を失う、元気・気力を失う」という意味です。落胆し絶望する人間は、どこか見ている場所が間違っています。ヘンリ・ナーウェンはこう言っています。

●「私たちが願い事でいっぱいです。そして私たちが待つ時は、これらの願望にすっかり絡めとられています。…未来を思いどおり操作しようとする生き方になりま

す。…しかしザカリア、エリサベト、マリア、シメオン、アンナは願望で満たされたわけではありません。彼らは希望に満たされていました。…私は自分の人生で、自分の願望を手放し、希望を抱くことが重要であることを学びました。」

希望と願望は違います。希望は神から出たもので、必ず成りますが、願望は人から出たものであり、適わないことが多いのです。願望だけだと人は落胆し、気力を失います。神に希望を持ち、神のなさることを楽しみにして待つのです。

②【復活とはこの同じ肉体が変容すること、肉体を軽視してはならない】

「わたしたちの地上の住みかである幕屋が減びても、神によって建物が備えられていることを私たちは知っています。」(5:1)「幕屋」は英語では「テント」、「建物」は英語では「ハウス」です。私たちの今の体はテントです。仮のものなのです。しかし神は永遠に朽ちない堅固な家を用意して下さっています。パウロはこの朽ちない天の体を何とかしてこの地上で着たいと願い、苦しんでいるといいます。ただ「こんな弱い、限界のある、罪を犯す体なんか嫌だ、さっさと脱いでしまいたい」と言って苦しんでいるのではなく、「死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。」(5:4)と述べています。この呪われたような体をキリストの命が飲み込んで変えて欲しい、この地上の体を脱ぎ捨てるのではなく、その上に永遠の体を着たいと言っているのです。ここにキリスト教の考え方がはっきりと出ています。復活というのは、全く別人の体をもらうのではなく、この私の体、長年私のわがままにつきあい、私の悪い癖のために歪んでしまい、私のために犠牲になって働いてくれた、この住み慣れたこの古い体が、内なるキリストに飲み込まれて完全なものに変容することなのです。イエス様も復活をされた時、生前と同じ体を栄光化され、傷をもったまま復活されました。まったく別人なら弟子たちは分からなかったはず。「この体か？もっと別の体の方がいいな、もっとかっこよく、素敵だ。」と思うかもしれません。でも病も欠けも無い、完全な体になるのです。蝶でさえ、幼虫のような醜い姿ではなく美しい姿になるのですから、私たちも美しくなると期待をして良いのです。

この背景には当時のグノーシスキリスト教の教えがあります。彼らは罪を犯すような弱い体は、旧約聖書の劣った神が創造したからであって、何の役にも立たない、大事なものは知識だけだと、霊肉を分離し、肉体を軽視しました。しかしキリスト教はこの肉の体が大事であると教えます。この弱い、肉の体も全能なる神が創造された善いものであって罪はありません。罪は肉体にではなく、魂に働くのであって、肉体はむしろ犠牲者です。私たちは結構、自分の体を嫌がり、いじめています。でもキリストはその体を愛しています。教会に集まって来る人たちを見ていると、まるで血液が心臓に戻って来るように、その人の内に住んでおられるキリストが、彼らを本体である教会へ連れてきているのが分かります。そこでキリストの体を食べ、血を飲み、地上の人間が天上の人間に聖変化するのです。地を見ていた目が天を見る目に変えられ、地のことを聞いていた耳が天に向かって開きます。礼拝が私たち

を天に引き上げます。聖餐の時、「死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまう」のが実現しており、私の内におられるキリストの方が私より大きいのが分かります。聖ヨハネはそのことを良く知っていてこう言いました。「あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです。」(Iヨハネ4:4) このようにキリスト教とは単なる教えではなく、真に実体的、身体的なものです。これは現代の教会に欠落していることです。私の説教を読んで分からない人は、キリスト教を知識だと思っていて聖餐を軽視しているからです。私は主の創造の業を言っているのです。

●逢坂元吉郎はこう語ります。「福音は単なる教えではなく、やがて死んでゆく我の中に、もう一つキリストを信ずる身体があって、それは死なないということを体得することである。…ペトロは周知のごとく素朴な田舎人であった。この田舎人が素朴なままでキリストの永遠の生命をつかんだ。それは道徳ではなく、学問でもなく、宗教経験であった。」「教会はイエス・キリストを頭と仰ぐと共に、イエス・キリストを食べる場所である。…この食べること、これ無教会の人々の知らぬところであり、プロテスタント教会の軽視するところである。そのため彼らの生活には、キリストの身体が形成されない。…信仰はあっても聖餐に陪している者といない者は、どこか違うところがある。」

●四世紀のシソエスという師父の最後について次のような記事があります。死の床で師父シソエスの顔が太陽のように輝き始めました。彼は叫びました。「見よ、師父アントニイが来る。」さらに「見よ、使徒たちの群れが来る。」彼の顔はますます輝きをましてきました。すると彼は誰かに話しかけているような様子を示しました。弟子たちが彼の周りを囲んで、誰と話しているのか尋ねました。「天使たちがやってきて、私を連れてゆこうとしているので、もう少しだけ時間をくれるように頼んだのだよ。ちょっとでも悔い改めができるように。」と彼は答えました。弟子たちは驚いていました。「父よ、もはやあなたには悔い改めの必要などないはずです。」彼は答えました。「本当のことを言うと、私自身、今の今まではたして悔い改めを始めたかどうかさえも疑わしいのだよ。」その瞬間、彼の顔から発する光は一層輝きを増し、弟子たちは畏れに満たされました。「見よ、主がやってくる。」師父シソエスはそう叫んで息を引き取りました。

師父シソエスはまだ悔い改めもできていないといましたが、知らない内に自分の中にキリストの似姿が出来上がっていたのです。それが臨終の時に、外にいるキリストに呼ばれて、隠れていた内なるキリストが共鳴して互いに引き合い、輝いたのです。聖マカリウスも「復活の日、聖霊の栄光は聖人たちの体を飾り、覆ってその内から輝き出る。この栄光は彼らが以前から持っていたものであるが、それまでは彼らの魂の内に隠されていたのである。」と言っています。

「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼寝起きしている内に、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。」(マルコ 4:26~27) という言葉を思い出します。私たちの人生の終わりの時に、私たちの中に隠れておられるキリストが輝いて下さいますように祈りましょう。